Picasso

ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　11

フォークナー
ラーゲルクヴィスト

訳者　速川　浩
　　龍口直太郎
　　山口琢磨
　　大島利治
　　高橋正雄

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年6月5日　発　行
発行者／石　川　数　雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号　101
振　替　東京180番
電話　東京(03)294-1111(大代表)

印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス／日本クロス工業株式会社
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社　1971　Printed in Japan
0397-522117-3062

目次

フォークナー

選考経過…シェル・ストレムベリイ……大島利治訳…6
授与演説…グスタフ・ヘルストレーム……高橋正雄訳…9
受賞演説……高橋正雄訳…12

兵士の報酬

……速川　浩訳…13

短　編

……龍口直太郎訳…181
エミリーにバラを……183
あの夕陽……191
乾燥の九月……208

人と作品…ウィリアム・ヴァン・オコーナー……大島利治訳…219
著作目録……速川　浩編…388

ラーゲルクヴィスト

選考経過…シェル・ストレムベリイ……山口琢磨訳…236
授与演説…アンダーシュ・エステルリング……山口琢磨訳…240
受賞演説……山口琢磨訳…242

刑吏……山口琢磨訳…247

こびと……山口琢磨訳…279

人と作品…エリク・ヤルマール・リンデル……山口琢磨訳編…375
著作目録……山口琢磨編…389

肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、234
カラーさしえ／エーメ・スタインレン
（フォークナーの作品）……
16～17、32～33、64～65、80～81
96～97、112～113、144～145、176～177

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ウィリアム・フォークナー

一九四九年受賞（五十一歳）

（アメリカ　一八九七〜一九六二）

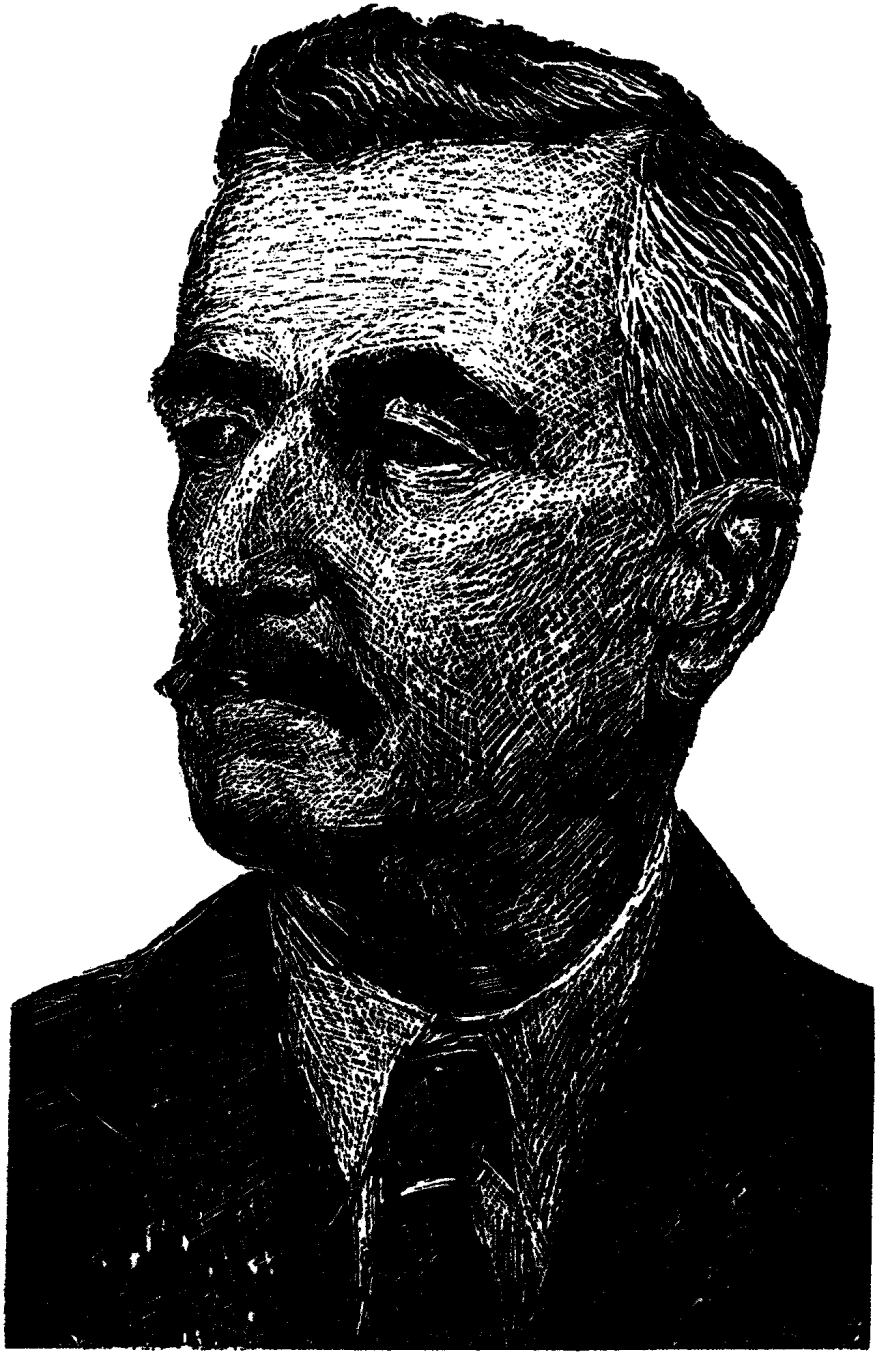
兵士の報酬

短　編

エミリーにバラを

あの夕陽

乾燥の九月



Wilbur Faulkner

フォークナー

選考経過

授与演説

受賞演説

ウィリアム・フォークナーに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官
シェル・ストレムベリイ

一九四九年、スウェーデン・アカデミーはノーベル文学賞を授与するのに必要な過半数の会員を集めることができなかった。そこで、会議の開催を取り消し、決定を翌年にのばすことになった。候補者に不足したわけではなかった。ただ、各方面から推薦されたひとびと――そのなかの大部分とはいわないまでも、いく人かはすでに受賞資格者名簿に当然名をつらねてしかるべきだった――のなかからたったひとりの名前をえらぶことで意見の一致をみなかったのである。

こうしたことは過去にもいくつか例があったが、今回は、スウェーデンはもとよりほかの国でも新聞で大々的に取沙汰され、それが議会にまで波及した。アカデミーの無能ぶりが公然と非難され、アカデミーはそっくり再編成されて、新しい規約がつくられるべきだ、もしくはノーベルの遺言により課された義務から解除されるべきだ、という要求がなされた。アメリカでは、『コリヤーズ・マガジン』が、とりたててこれといった賞は受けていないが数冊のベストセラーの作者であるアーヴィング・ウォレスとかいう人の文章をのせて、ノーベル賞はその創設者の発明したダイナマイトに負けずおとらずの爆発物であることを暴露した、それもこれを授与する機関の言語道断な偏向のせいである。たとえば委員会は文学部門では反アメリカ的でありながら、科学部門においてはドイツびいきである、さらに全部門において反ロシア的である反面、またスカンディナヴィアびいきであることを示したと、数百万の読者にうったえたのである。なるほど一九五〇年までにノーベル賞選考委員会は、五十年にわたる活動を通じて、約二千八百万スウェーデン・クローナ――これはほぼ同額のフランス新フランに相当する――をそれぞれ二十四カ国を代表する二四二人の受賞者におくった。この時点においてはまだドイツが受賞者四六人で首位をしめ、アメリカの四五人、イギリスの四〇人がこれにつづく。スカンディナヴィア三国ないし四カ国は、フランスとおなじ二四のノーベル賞を獲得している。これは厳密にいうと、すこし多すぎるかもしれないが、しかし、この数字ははたしてそれほど物議をかもすべきはずのものであろうか。ウォレス氏の叫びは犬の遠吠えにすぎなかったのである。

こうして、スウェーデン・アカデミーは一九五〇年に二つのノーベル賞を授与することになった。アカデミーは、現行の規約に違反せずに、結局、一九四九年度のノーベル賞を保留にして、これを全体の基金のなかに払いもどすこともできたかもしれない。しかし、それは問題にのぼらなかった。したがって、一九四九年の賞はアメリカの小説家ウィリアム・フォークナーにあたえられ、一九五〇年度の文学賞はイギリスの哲学者バートランド・ラッセル卿にあたえられた。すでにその前年から、フォークナーはもっとも有力な候補者であったが、私の知るかぎり、アカデミー会員の票は、彼と、ウィンストン・チャーチル卿と、スウェーデンの詩人、劇作家、小説家のペール・ラーゲルクヴィストのあいだで割れて、採決されるまでにいたらなかったのである。もう二人のアメリカの作家、アーネスト・ヘミングウェイとジョン・スタインベックもまた競争相手であった。このほかに優勝をあらそう候補者としては、ロシアの二人の作家、ボリス・パステルナークと『静かなドン』の作者ミハイル・ショーロホフ、さらに六人をこすフランスの作家たち――このなかには先にあげたほかの競争者の大部分とおなじように、将来ノーベル賞受賞者となるフランソワ・モーリヤックやアルベール・カミュもふくまれている――がいたことを記しておこう。

Faulkner ――本名 Falkner ――は、アメリカで声価がたかまるよりもさきに――どうもそうらしい――一九三九年の戦争よりもずっと前に、西ヨーロッパ、とくにフランスで確固たる名声をえていた。第一にジャン・ポール・サルトルとその仲間の実存主義者たちがフォー

クナーの宣伝役を買ってでて、この新しいアメリカの天才の解説者となり――おなじ南部アメリカの同郷人ジョン・ドス・パソスとならんで――現代のもっとも重要な、もっとも独創的な作家として紹介したからである。スウェーデンでフォークナーの作品がさいしょに翻訳されたのは一九四四年である。そのとき翻訳されたのは、一九三二年に出版され、サルトルが絶賛した『八月の光』であるが、これ以外の作品の翻訳も矢つぎばやに刊行され、スウェーデンの大新聞の文芸消息欄では、素朴でしかも洗練された新しい芸術の出現として歓迎された。フォークナーは、彼がえがく世界のせまい限界や、そこに住む黒人や白人の独特な性格にもかかわらず、現実世界における人間の条件について広い視野をひらいてくれるように思われたのである。すでにカフカやジョイスから手ほどきをうけていた戦後の若い世代は、たちまち、有罪宣告をうけた文明の終末を感じさせる、この下がかった趣味をもつ内臓的ロマンチシズムの文学にひきつけられた。

先入観をもたない不意の読者に、ウィリアム・フォークナーが独壇場にしている文学世界がどんなものか想像してもらうのに、ふつうすぐに思いつく名前はドストエフスキー、ポー、ジョイスである。スウェーデン・アカデミーのノーベル賞委員会の報告官で、さいきんこのアカデミーの会員にえらばれた、アングロ・サクソン文学の専門家、すぐれた小説家のグスタフ・ヘルストレームがこの問題をとりあげたのも、この面からである。ヘルストレームは、フォークナーの作品について突っこんだ分析をしたあとで、フォークナーは大衆にはちかづきにくい作家であること、つぎに、フォークナーは彼のおもだった競争相手、たとえばヘミングウェイやスタインベックほど広い読者層をつかんでいない、それどころか彼らに及びもつかないことを認めた。地図の上にはっきり線をひかれた一地方、ジェファソン・シティという小さな町とその近隣地域――彼の生まれ故郷であるミシシッピ州オックスフォードの別名――を終始一貫えがきつづけてきたフォークナーは、報告者のヘルストレームに二人の偉大なスウェーデンの物語作者、セルマ・ラーゲルレーヴとヤルマル・ベルイマンの名を思いださせた。この二人とも、彼らがなれしたしんだ名もない一地方を魔法の光に照らされた広大な世界の舞台にかえて、そこに異常な人物がうごめく人間社会の動態を現出させたのである。もちろん、フォークナーの異国的世界では、雰囲気はさらに暗く、事件はさらに激烈である。荒れくるう性欲の非情な戦いに、種族同士の敵意がくわわっている。ヘルストレームはこの点についてこれ以上力説しなかった。こうしてフォークナーの物語の手法はことのほか複雑であり、しかも、昔の黒人奴隷とその子孫とのあわれな混成英語をもふくめて、過去さらに現在にわたるあらゆる表現方法をとりいれた彼の言語は、きわめて語彙がゆたかである。報告官の目に、フォークナーは北アメリカはいうまでもなく、あらゆる英語国家のうちでもっとも注目すべき作家としてうつったのである。

この生まれながらの小説家とくらべると、あのヘミングウェイでさえ、たしかに非常に器用で、文体の点ではずっと上級クラスに属するが、現実問題のたんなる探訪記者程度にみえてくると、ヘルストレームは断言した。結局、フォークナーが立派にノーベル賞に値したということは疑いをはさむ余地のないことであろう。

スウェーデン・アカデミーはそこで、こうした論証をみとめ、たいした異論もなく、ノーベル賞は《新しいアメリカ小説への芸術的で、力づよい、独創的な寄与にたいし》ウィリアム・フォークナーに授与されることになった。

スウェーデンの批評界が、すでに前年度に表明した彼らの希望にそったこの選考をひじょうによろこんだのにたいして、英米の新聞の論評ははるかに冷やかで、それに数もすくなく、かなりあっさりしたものだった。

『ニューヨーク・タイムズ』は、《ウィリアム・フォークナーの評判は、生まれ故郷のミシシッピ州から遠くはなれればはなれるほど、正比例して高くなる。ミシシッピ州はまさに崩壊のまっただ中にある、ある社会構造を、暗く、強烈にえがきだしたフォークナーの画面の背景をなしており》、そこでは、永久に彼の作品が正しく理解されることはないであろうし、その真価がみとめられることはほとんどあるまい、とのべている。しかしながら、初期の小説、とくにいちばん有名でいちばん人気のある『サンクチュアリ』(一九三一)によって、フォークナーは《もっぱら血なまぐさい暴力と道徳的頽廃の物語に終始する》地方主義文学の流派をきずいたといえよう。

『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』は、フォークナーによっ

て、アメリカ合衆国が――シンクレア・ルイス、ユージン・オニール、パール・バックについで――四番目のノーベル文学賞を獲得したことをよろこびながらも、ほぼおなじ趣旨のことをのべている。とにかく、新受賞者は、彼の小説の各ページにみちあふれている悪夢の魅力、しかし多くの場合《その嵐をはらんだ雰囲気のもつ強烈さと、まさに言葉の難解さによって精彩をはなつ》彼の小説がなかなかわかりにくい本国人よりも、むしろヨーロッパのほうでより広く知られ、より高く評価されたことになろう。《暗い方向にむかいつつある世界にあっては、もっと明るい作家が受賞者にえらばれたほうがのぞましかったかもしれないが、授賞をめぐっておこなわれた論争の正しさをこの事実ほど証明してくれるものはあるまい》と、この新聞は、フォークナーのノーベル賞をとりあげた社説をむすんでいる。

イギリスの新聞もおおむねその賛辞はひかえめなものであったが、ただ『タイムズ』が「奥ぶかい南部(Deep South)」の小説家フォークナーの作家としての創作力をみとめながらも、彼の《謎めいた文体》については、それがあまりにもしばしば彼の文章を読みづらくしているとして、かならずしも満腔の賛意をあらわさなかった。《今日、英語で執筆しているいかなる作家も、彼ほど傍若無人に言葉を虐待しているものはないように思われる》と、このロンドン商業区最大の機関紙は主張している。だからといって、《あらゆる種類のおぞましいことどもを語るその省略語法により、フォークナーが読者の神経を刺激し、はらはらさせることには》やはりかわりがないのである。

ラジオで報道された受賞の知らせをフォークナーが知ったのは、街で会った友人の口からであった。しかし、彼はなかなか信じられなかった。だが、家に帰ったとたん、アメリカ各地、さらにヨーロッパからも電話がかかってきて、これに応接しなければならず、それはもはや疑いようのない事実になった。誰にむかっても、彼はあくまで一介の農民(farmer)としてとどまり、綿畑やかわいい家畜をほうっておいて、せいぜい地図の上の位置くらいで、なにも知らない遠い国へ賞をもらいにゆくつもりは毛頭ないとつたえたのだった。しかし、本屋からの印税の歩合が急に高くなったことや、各国語への翻訳の申し込みが殺到したことが彼の気持をかえさせることになった。というのは、ぎりぎりの瀬戸際になって、彼は燕尾服を新調して、空路ストックホルムへむかうことを決心したからである。

一九五〇年はちょうどこの賞の第一回の授賞がおこなわれてから五十周年にあたり、ストックホルムでは例年よりも盛大にノーベル賞授与の式典が挙行された。音楽堂の大会場の万国旗と花でかざられた壇上には、本年度の新受賞者はもとより旧受賞者も三〇人ばかり居ならんでいた――そのほかにもこの祝典に約二〇〇人のひとびとが招かれていた。たいへん小柄で、ずんぐりしたフォークナーが、非のうちどころのない禁欲主義者だが、いかにも貴族的な容貌をした大男のイギリス人バートランド・ラッセルとならんで姿をみせたとき、一瞬、ドン・キホーテとサンチョ・パンサのあの有名な二人組のイメージが心をよぎった。しかし、それも一瞬のことにすぎなかった――なぜなら、フォークナーがノーベル賞のメダルをうけとってから、さいごに国王グスタフ六世アドルフの前でうやうやしくお辞儀をしたときには、彼自身そうよばれることをいつものぞんでいた、あのちびの《ミシシッピの農夫》の名にこれほどふさわしいものはほかに想像できなかったからである。階段の上に立ち、まるで木像のように身動きひとつせず、陽にやけた顔にそれとわかる感動の色もみせずに、フォークナーはそのあと上品な参列者たちから大きな拍手をうけた。

これにさきだって、スウェーデン・アカデミーにおけるフォークナーの熱烈な支持者であるグスタフ・ヘルストレームが、前掲の報告書とほぼ同文の演説をした。もっとも、一九一八年にカナダのイギリス空軍へ志願兵として入隊した元航空兵、若かりし日のフォークナーにたいして感動的な敬意を表することも忘れなかった。しかし、航空兵としてのフォークナーが戦争中ついに大西洋を横断する機会をもたなかったことは、演説者のヘルストレームも知らなかった。フォークナーがはじめてフランスをおとずれたのはそれから数年のちのことである。たしかに初期の小説のひとつ――『兵士の報酬』(一九二六年出版)――で、フォークナーはある空軍操縦兵の悲劇的冒険を語った。それがあまりに真にせまる筆致だったので、誰も彼も、作者は自分自身の体験を語っているのだと信じて疑わなかった。

授与式のあとシティ・ホールでもよおされた恒例の祝賀会で、フォークナーは一九三五年のノーベル化学賞の受賞者イレータ・ジョリオ・キュリー夫人〔フランスの物理学者キュリー夫妻の娘にあたる。一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九七〜一九五六〕と隣席になり、さかんに意気投合しているようだった。感謝の演説――これは彼が公衆の前でおこなったさいしょの演説だったが――のなかで、フォークナーは、人間の頭上には脅威が山のようにのしかかっているが、われわれが人間の尊厳を自覚しつづけるかぎり、わたしは人間の抵抗力に信頼をよせるものだ――詩人がこれに力をかしてくれるだろう――とのべた。つぎにかかげるのが、その見事な演説の結論である。いままですべての作品で、堕落した世界の世にも恐ろしい光景を強調してえがき、そこからどちらかといえば虚無主義的な結論をひきだしてきた作家がのべたものとしては意外な感じがしよう。《魂を高揚し、過去の人間の偉大さをかたちづくってきた勇気、名誉、矜持、同情、犠牲の精神をよびもどすことによって、人間がみずからの運命を甘受できるように助けられるとすれば、これはすばらしいことであります……私は、人間はただ耐えているばかりではないと思います。やがては頭をもたげるでしょう。人間は不滅です。万物のなかで人間だけが永遠に消えない言葉をもっているからではなく、人間には魂が、憐憫と、犠牲と、忍耐の感覚があるからであります。》

（大島利治訳）

ウィリアム・フォークナーに対するノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデンアカデミー会員
グスタフ・ヘルストレーム

一九五〇年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

ウィリアム・フォークナーは本質的に地方的作家であり、この点で、スウェーデンの読者たちはわれわれの国の最も重要な小説家であるセルマ・ラーゲルレーヴとヤルマル・ベルイマンの二人を時として連想することだろう。フォークナーの祖国はミシシッピ州北部であり、彼の作品の舞台はジェファソンと呼ばれる町である。彼とわれわれの二人の同国人との類似をたずねていけば、幅広く奥深いものになるであろうが、今はそうした探求をするだけの余裕はない。フォークナーとその二人のあいだの相違は――それは重大な相違であるが――フォークナーの作品の舞台がラーゲルレーヴの騎士たちやベルイマンの奇怪な人物たちの生きているそれよりも、はるかに暗く、はるかに血なまぐさいということだ。フォークナーはさまざまな背景を持ったアメリカ南部の叙事詩作家である。つまり、黒人奴隷の安い労働力の上に築かれた輝かしい過去とか、南北戦争とか、当時の社会機構にとって必要だった経済的地盤を破壊した敗戦とか、あとあとまでも尾を引いた痛ましい怨恨とか、さらには、それのもたらす生活の機械化と標準化

は南部人にはなじみがなく、受けいれがたいものなので、容易には適応できないような産業主義にとらわれた未来とかいう、さまざまな背景を持っているのだ。フォークナーの小説群はこうした苦難の過程を、継続的に、一作ごとに底を深めながら、描いてきたのであるが、それは彼が親しく知り、身にしみて感じている過程なのである。というのも彼は、貧困とか衰弱とかさまざまに形を変えた堕落といった敗戦のにがい果実を、その虫に喰われた芯までそっくり呑みこまされた一家の出身なのだから。フォークナーは反動主義者と呼ばれている。しかし、たとえこの言葉がある程度正当化されようとも、それは彼が倦むことなく書きつづけている暗い物語の中で次第に明らかになりつつある罪悪感によって埋めあわされている。非人間的行為は紳士的環境とか、騎士道とか、勇気とか、しばしば極端な個人主義とかの代償となっていたのである。これを要するに、フォークナーのジレンマはこんなふうにいえるかも知れない。彼は、正義感と人情を持っている自分にはどうしても我慢できないような生き方を嘆き悲しみながらも、作家としてそれを誇張しているといえるのだ。それだからこそ、彼の地方性が普遍的なものになりうるのである。四年間の血なまぐさい戦争は、ロシア人は別として、ヨーロッパの国民が百五十年もかけてへてきたような変化を社会機構の上にもたらしたのだった。

五十二歳になるこの作家は、彼の重要な小説群を戦争と暴力を背景にしてこしらえている。彼の祖父(正しくは曾祖父——訳者)は南北戦争中に高級指揮官をつとめた。彼自身、武勲と、決して認めなかった敗戦のもたらす苦しみと貧困によって作り出された雰囲気の中で成長した。彼は二十歳の時、カナダ英空軍に入隊し、二度墜落して、帰還したが、戦争の英雄としてではなく、前途に当てのない、肉体と精神に傷を負った青年として帰ってきたのであり、そのあと何年か不安定な生活にさらされた。彼が戦争に加わったのは、彼の初期の小説の一つの中で、彼の分身が述べているように、「だれしも戦争を無駄にしたくはない」からだった。しかし、一度は戦争の興奮を激しく求めた青年の中から、暴力に対する嫌悪が次第に激しく表明され、ついにはそれが「汝殺すべからず」という第五の戒律に要約してもさしつかえないほど確固たるものになった人間が出来あがっていった。ところがその一方において、人間がどうにも忍びがたいことを必ず示さなければならない事柄がある。彼の最近の作中人物の一人はいう。「人間はある種のことは決して忍んではならない。不正と屈辱と不名誉と恥辱だ。名声のためでも金のためでもない——ただこうしたものにはどうにも我慢できないといえ」人はあるいは、この二つの訓言をどうしたら調和することができるのかと、フォークナー自身はこの国際的不法の時代において、どのようにしてこの二つのあいだに調和を見いだそうとしているのかと、たずねるかも知れない。しかし、これは彼が未解決のままにしている問題の一つなのである。

実のところ、作家としてのフォークナーは、アメリカ南部の経済状態の突然の変化について社会学的解説を加えたがらないのと同じように、問題を解決することには関心がないのである。敗戦とその結果は、そこから彼の叙事詩が生まれてくる単なる土壌にすぎない。彼は一つの共同体としての人間にではなく、共同体の中にいる人間に、つまり外的な条件には不思議なほど動かされない、それだけで完結した統一体としての個人に、心惹かれている。こうした個々人の悲劇にはギリシャ悲劇と共通するものはなに一つない。なぜなら、それが悲劇的結末に追いやられるのは、遺産とか伝統とか環境に呼びおこされる情熱に、おそらく何代もつづいてきた拘束からの突然の釈放とか漸進的解放とかいう形で表わされる情熱によるのだから。フォークナーはほとんど一作ごとに人間の精神を、人間の偉大さと自己犠牲の力を、権力欲や、貪欲や、精神的貧困や、偏狭や、滑稽な頑迷や、苦悩や、恐怖や、堕落などを、いよいよ深くきわめていく。彼は探求的な心理学者として、現存の英米作家の中でならぶ者のない巨匠なのだ。彼の同僚には、彼ほどの奇抜な想像力と人物創造の能力を持っている者は一人もいない。彼の創り出す人間の名に値しない人物や超人的人物は、それは不気味な格好で時には悲劇的だったり時には喜劇的だったりするのだが、現実の人間には——われわれのもっとも身近な人々でさえ——与えることのできないような真実性を持って、彼の心から生み出されてくる。そして、それらの人物は亜熱帯の植物の匂いや、貴婦人の香水や、黒人の汗の臭いや、馬とか騾馬の臭いが、スカンディナヴィアのあたたかくて心地いい小部屋の中にもじかに滲みこんでくるような背景の中を動きまわるのだ。風景の描き手としてのフォークナーは、猟人が自身の猟場について持っているような詳細な知識と、地誌

作者のような正確さと、印象主義者のような敏感さを持っている。さらにフォークナーは――ジョイスとならんで、いやおそらくジョイス以上に――二十世紀作家の中での偉大な実験家でもある。彼の小説はほとんどどれ一つとして技巧的に同一なものはない。彼はこのようにつぎつぎに技巧を変えることで、地理的にも主題的にも限られている彼の世界では与えることのできない幅の広がりを増大したいと考えてでもいるようである。同じような実験欲は、現代の英米作家の中にはならぶ者がないほどの多彩な英語の駆使の中にもうかがえるが、その言葉の豊かさはさまざまな言語学的要素と文体の周期的変化から生まれるものであり――エリザベス朝の人々の精神から南部の黒人のとぼしいが表現力に富んだ用語にまでおよんでいる。また、メレディス以後――おそらくジョイスを除いては――彼のように、大西洋のうねりのように無限で力強い文章を構成するのに成功した人はだれ一人いない。それと同時に、同時代の作家の中で、一連の短い文章によって連続的事件を描き出す点で彼におよぶ者はほとんどいないが、彼の短い文章の一つ一つは、釘を頭まで板の中に打ちこみ、しっかりと止めてしまう金槌の一打ちに似ている。彼は言葉の資源を完全にわがものにしているので、言葉と連想をつぎつぎに積み重ね、それによってはらはらさせたり、入りくんだりしている物語の中で読者をじりじりさせることができるし――事実しばしばそうするのである。だがこうした言葉の濫費は文学的虚飾とは別のものなのだ。またそれは、彼の想像力のあふれんばかりの活発さを証明するだけのものでもない。そうした豊かさの中で、新しい修飾語の一つ一つは、新しい連想の一つ一つは、彼の想像力が生み出す実在をより深く究めようと意図しているのである。

フォークナーはしばしば決定論者といわれている。しかしながら、彼自身は特定の人生哲学への傾倒を表明したことは一度もない。一口でいえば、彼の人生観はおそらく、全体は(おそらく?)なに一つ意味しない、という彼自身の言葉に要約できるかも知れない。もしこれが実情でなければ、全体的構造を組み立てているものがだれであれ、物事は現状とは違ったようにならべられていたことだろうから。それにもかかわらず、その全体はなにかを意味しているに違いない。なぜならば人間は戦いつづけ、いつかそれがすっかり終わる日まで、戦いつづけなければならないからだ。だがフォークナーは一つの信念を、というより一つの希望を、持っている。すなわち、人はだれしも遅かれ早かれ自分が当然受けるべき罰を受けるということと、自己犠牲は単に個人的な幸福をもたらすだけでなく、人類全体の善行の総和を増すことになるということである。これは一つの希望であるが、このうちの後者は、スウェーデンの詩人ヴィクトール・リュドベリーが一八七七年にウプサラでの学位授与式において披露したカンタータの叙唱の中で表明した、あの確信をわれわれに思い出させよう。

フォークナー氏――あなたが生まれ育った南部の州の名前は、あなたにとっても子供時代の大の仲良しであったはずの、トム・ソーヤーとハックルベリー・フィンの二人のおかげで、われわれスウェーデン人にもなじみのものとなっています。マーク・トゥエインはミシシッピ川を文学的地図の上に書き入れました。そして五十年後に、あなたは一連の小説を書きだし、それによってミシシッピ州から二十世紀世界文学の画期的仕事の一つを生み出したのであり、それらの小説は、一作ごとに変化する形式と、いよいよ深まり、いよいよ強まる心理的洞察と、――善人であっても悪人であっても――決して忘れることのできない作中人物によって、今日の英米小説の中でユニークな地位を占めているのです。

フォークナー氏――わたくしは今あなたに、スウェーデン・アカデミーがあなたに贈ることにしたノーベル文学賞を、スウェーデン国王の手から受けとるようにお願いできることを無上の光栄に思います。

祝賀会の際に王室科学アカデミー会員のロビン・ファラウスはこのアメリカ作家につぎのように話しかけた。「ウィリアム・フォークナーさん――わたしたちはあなたがノーベル賞を受けとるために御自身でこの国においでになると聞いて、大変嬉しく思いました。わたしたちはすぐれた芸術家であり、人間精神の公平な分析家であり、人間の人間自身に関する知識を素晴らしい方法で増大してくれた作家であるあなたにお目にかかれて、心から喜んでおります」　(高橋正雄訳)

受賞演説

この賞は、一人の人間としてのわたくしに授けられたものではなく、わたくしの仕事に――栄誉のためでも、ましてや金のためでもなく、人間の精神を素材にして、かつて存在したことのないようなものを創り出すために、人間精神の苦悶と汗の中でなされてきたひとつの人間の仕事に――授けられたものだと、わたくしは感じている。それ故、わたくしはこの賞を単に委託されたにすぎない。この賞にともなう賞金を、この賞の本来の目的と意義にふさわしいように使う方法を見つけることは、困難ではないと思う。しかし、わたくしは、その名誉についても、同じ使い方をしたいと思う。つまり、この機会を、すでに同じ苦悩と苦労に献身しており、その中にはいつか今わたくしが立っているこの場所に立つに違いない人もいる、若い男女に語りかける絶好の場所として利用したいと思うのである。

今日のわれわれの悲劇は、世界いたる所に見られる肉体的恐怖があまりにも長くつづいているので、われわれはそれを我慢できるようにさえなっていることである。今ではもはや精神の問題などなくなっている。あるのはただ、いつ自分は吹き飛ばされるか、という質問だけなのだ。そのため、今日ものを書いている若い男女は、人間の心がそれ自身と戦うところに生まれる問題を忘れているが、その問題以外に立派な著作を生み出すことはできない。なぜなら、それだけが書くことに値し、その苦悶と汗に値する唯一のものなのだから。

彼はふたたびそれらの問題を学ばねばならない。恐れるということがすべての中でもっとも卑しいことだということを、自らに教えなければならないし、それを教えることで、その恐れを永久に忘れ、自分の仕事場に、あの昔からの心の真実と真理以外には、なにものもはいりこむ余地のないようにしなければならない。その心の真理とは、それがなければいかなる物語もつかの間の、はかないものにならざるをえない、あの普遍的な真理であり――愛と名誉とあわれみと誇りと同情と犠牲なのである。これだけのことを学ぶまでは、その人の努力は決して報われることはない。彼は愛ではなくて欲望について書き、だれ一人価値あるものを失うことのない敗北について、希望もなければ、さらに悪いことには、あわれみも同情もない勝利について書くことになる。彼の悲しみは世界全体の誤りについて悲しむのではなく、なんらの跡を残さないことになる。彼は心についてではなく、腺について書くことになるのだ。

こうしたことをふたたび学ぶまでは、彼はあたかも人間の終末にかこまれ、それを眺めている思いで、書くことになろう。だが、わたくしは人間の終末を認めたくない。人間は耐えしのぶという理由だけからも不滅であるということは、きわめて容易である。すなわち、この世の終わりを告げる鐘の音が鳴りひびき、その響きが、まさに消えようとする最後の赤い夕日の中でもいささかも様子を変えずにころがっている、あの最後の取るにたらない岩からも薄れていく時に、その時でさえ、もう一つの響きが聞こえると、人間のささやかだが尽きることのない声がなおも話しつづけているのが聞こえるといえるのだ。しかし、わたくしはこれすら受け入れたくない。わたくしは、人間は単に耐えるのみならず、栄えるものだと信じるのだ。人間が不滅だというのは、万物の中で人間だけが尽きることのない声を持っているからではなく、魂を、同情と犠牲と忍耐の可能な精神を持っているからなのである。そして詩人の、作家の義務は、こうしたものについて書くことなのだ。人間の心を高揚し、人間の過去の栄誉とされている勇気と名誉と希望と誇りと同情とあわれみと犠牲とを思い出させることによって、人間が耐えしのぶのを助けることが、詩人に与えられた特権なのである。詩人の声は単に人間の記録である必要はなく、それは人間が耐えしのび、栄えるのを助ける支柱のひとつになりうるのである。

（高橋正雄訳）

兵士の報酬

SOLDIERS' PAY

速川浩訳

一章

I

アキリーズ――候補生、けさ、ひげを剃ったか。
マーキュリー――剃ったであります。
アキリーズ――何で剃ったか。
マーキュリー――官給品であります。
アキリーズ――仕事に掛かれ、候補生。

――古典劇
（約一九――年？）

ロー・ジュリアン、第――号、元航空候補生、飛行隊、第――中隊所属、彼の航空小隊の他の操縦士の卵たちに俗称「片翼」と呼ばれる彼は、娑婆を黄色な不満な目で眺めていた。彼のわずらっている黄疸は、彼より金筋の多い連中、上は航空司令官さては将官から、下は香り高き一本筋の少尉に至るまで（フランス人が美しくも航空兵の位を窺う者と呼ぶ、けったいな野戦場の獣どもは言わずもがなだが）同病だった。まったく彼の都合も考えず戦争を止めてしまったのだ。

そんなわけで彼はブルマン寝台車の特権を喜ぶ気も起こらず、やけと悲しみに悶々と癪の種の白線がついた帽子を親指でくるくると回して坐っていた。

「おい、兄弟、鼻を風にさらしたのかね？」と帰郷兵のヤップハンク[1]が悪ウィスキーの悪臭をプンプンさせて言った。

「ええ、止めてくれ」と彼は仏頂面をしてやり返すとヤップハンクが彼のくしゃくしゃにした帽子を取った。

『はいよ、大将――それとも中尉さんと呼ばなくちゃいけねえかね。御免下さいよ、奥様、炊事当番をやってガスにやられ、それ以来目が悪くなりましてね。ベルリンへ進撃だ！　そうとも、おれたちはベルリンへ進撃中だ。ベルリンめ、きさまをやっつけるぞ。おまえの正体がわかったぞ。ゼロ千ゼロ百ゼロ十ゼロ番、へいそつ（全くけいそつの）ジョー・ギリガンだ。閲兵に遅刻、使役に遅刻、朝飯が遅い時は朝飯に遅刻。自由の女神像もおれに会ったことはねえ、会ったら〝回れ右〟と来らあな」

ロー候補生は世の中にうんざりした目をあげて「おい、とにかく何を一体飲んでるんだ？」

「兄弟、おれも知らねえ。こいつを作ったやつは先週の火曜日に功一級をもらったんだ。戦争をやめさせる方法を考えたってんで。わが陸軍に全オランダ人を召集し、四十日間、こいつを浴びる程飲ませるんだ、なあ？　どんな戦争だってわやだ。わかったかよ？」

「へー、そいじゃあ戦争だかダンスだかけじめがつくまい？」

「それがつくんだ。女はみんなダンスがしてえ。まあ聞け、すごくいかす子がいてね、そいつが『あーら、あんた踊れないのね』と言やあがる。だから言ってやったね『できねえことがあるもんか』それで踊ってると『あんた一体何なのさ』と来た。『何でそんなこと知りてえんだ。おれはどこの将軍だろうが少佐だろうが軍曹にだって負けずに踊れるんだ。何しろポーカーで四百ドル稼いだばかりなんだからな』そうするとそいつが『本当なの？』と言やがる。『そうよ、おれを離すなよ、ねえちゃん』『どこにあるのよ？』だがおれはそれを見せなかったね、そうするとこの野郎が女の所へ近付いて『こんどの番は踊りますか？』と言やがる。『ええ踊るわ。このひと踊らないのよ』そいつは軍曹で、今まで見たこともねえでかいやつだった。そうだ、アーカンソーから来て黒んぼといさかいを起こしたやつに似ていたっけ。友だちがそいつに『おめえ、きのう黒んぼを殺したってでねえか』と言うと、そいつが『ああ、二百ポンドはあったな』クマを相手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com